

史実よりも夢を …

2018年6月に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が『世界遺産』に登録されま



した。大浦天主堂などの建築物も貴重ですが、250年余に渡り人々が密かに命がけで「信仰」を守り通した史実も忘れてはいけないと思います。戦後、「信仰」を無くした「民」だからこそ、今、表舞台に出られたのだと思います。

岐阜美濃の地にある私のお寺にも「踏絵」と



「マリア観音像」3体が寺宝として存在します。潜伏キリシタンの世界遺産登録による影響か、それを拝観に来寺される方が以前にも

増して多くなりました。カトリックの信者の方、潜伏キリシタンの研究者、2月から3月は俳句の方（踏絵はその頃の季語）、先月は神父さんが来寺されました。そのような方々をお迎える時、私の心は「幸静」です。

もう10年近く前に、時間潰しに金山駅の本屋で立ち読みをするため店に入ると、何気なく右の『2010年ベストエッセイ集』の本を手にしていました。死ぬ前日まで毎日かつ井を食べ続けた作家、永井荷風の本だと勘違いをしたの



です。無意識にページを開くと。144ページ宮沢優著「いらすの井戸の話」というタイトルのエッセイでした。「いらす」とは、遠い国「イスラエル」の事。2ページに渡るこれを読んで、「お導き！」だと直感しました。

その井戸は京都太秦(うずまさ)にあります。探しに行きました。広隆寺の駐車場入り口にある細い路地を入った所です。太秦は平安時代初期に中国から渡来した秦氏がつくりました。秦氏は、中国では「景教」を信仰していました。景教とは、ローマでのキリスト教の一派でした。派閥間の闘争に敗れ東方へ追放され、中国では景教と呼ばれていました。秦氏は漢訳の聖書を持参して渡来後も太秦の地で信仰を続けたと言われています。その証が「いらすの井戸」です。石の井戸囲いにひらがなでそう刻んだのも、



教えの原点でもあるイスラエルの地を偲んでのことでしょう。そう刻まれた井戸は、以前は太秦内に多数あったそう

です。だから、1549年にザビエルが日本にキリスト教を伝えるよりも前に、秦氏が伝えたこととなります。後に親鸞聖人は太秦に滞在した折に、秦氏から漢訳聖書を借り受け、それを読んでいたとの説もあります。親鸞の「悪人正機説」は、イエスの教えの「汝の敵を愛しなさい」からきている感じさえあります。

史実である証拠などありません。しかし、このエッセイのおかげで来訪されるキリスト教関係の方々を自然体でお迎えし、私なりのお話が安心して出来るのだと思います。 俊徳丸